

---

---

# 陸前高田地域再生支援研究プロジェクト

## 陸前高田の応急仮設住宅団地 調査報告〈概要版〉

2013年10月10日発行

---

---

### 〈目次〉

I	陸前高田地域再生支援研究プロジェクトの調査活動について	・・・	p1
II	陸前高田市の仮設住宅における暮らしの概要	・・・	p2
III	各地区の仮設住宅における暮らし	・・・	p7
1.	高田町の仮設住宅	・・・	p7
2.	竹駒町の仮設住宅	・・・	p9
3.	横田町の仮設住宅	・・・	p11
4.	気仙町の仮設住宅	・・・	p13
5.	米崎町の仮設住宅	・・・	p15
6.	広田町の仮設住宅	・・・	p17
7.	小友町の仮設住宅	・・・	p20
8.	矢作町の仮設住宅	・・・	p22
9.	住田町の仮設住宅	・・・	p24

### I 陸前高田地域再生支援研究プロジェクトの調査活動について

本プロジェクトは、陸前高田市において、被災住民自身が地域の再生、生活再建に向けてその課題を話し合い、主体的な取り組みを行うことを支援することを目的として今日まで活動を続けてきています。

去る8月3日から7日、23日から26日の2期に分けて、法政大学・明治大学・中央大学・神戸大学・東北大学等の教員・学生等述べ約120名が参加して、陸前高田市内の49ヶ所と隣接する住田町の3ヶ所の仮設住宅団地を訪問しました。この調査は、2011年度、2012年度に続き3回目の調査になります。自治会長さんに、事前の協力を得た上で、入居後約2年が過ぎて仮設住宅における転出・転入の状況、高齢者や子どもなど配慮が必要な人の状況、住環境上の問題と対応、自治会活動の状況、外部支援団体の状況、住宅再建・復興まちづくりに関する情報や意見などについてうかがいました。

また今年、初めて陸前高田市仮設住宅連絡会の協力を得て、仮設住宅の居住者の皆さんに今後の住宅と暮らしの再建に関する意向についてアンケート調

査を実施いたしました。

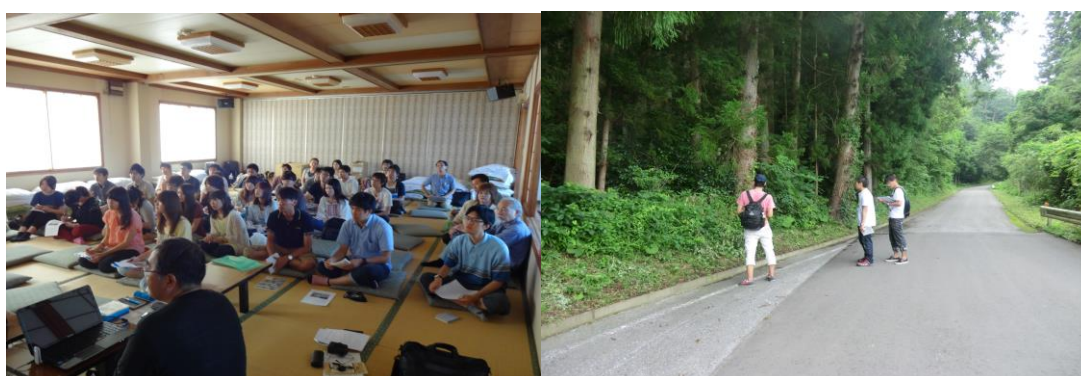
自治会長さん、また居住者の皆様のご理解と協力をいただき、インタビュー調査は、49の仮設住宅、アンケート調査は、800部を超え約4割の世帯からお答えいただくことができました。あらためて関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

入居3年目を迎え、仮設住宅での暮らしが長期化する中、高台移転などが目に見えてきた地域と、なかなか将来の展望が目に見えない等多くの不安の声も寄せられました。各仮設住宅団地のデータの詳細、アンケート調査の結果は、後日改めて報告するとして、取急ぎ〈概要版〉をお届けします。

本プロジェクトは、各大学の建築・都市計画、国土計画、社会福祉、社会学、臨床心理、公共政策、社会疫学、歴史学などの研究者・実務家が、相互に協力・補完しながら、今日まで陸前高田市において、長部地区や広田地区の防災集団移転協議会の組織化支援や復興まちづくりに向けたワークショップの実施、仮設住宅自治会長への情報提供など、被災住民が主体的に復興まちづくりに取り組むための支援活動を行ってきました。

今回の調査では、先ず震災防災語り部の釘子明さんに、震災直後の陸前高田市の被災状況や避難所の運営などについて、講演していただきました。当時の写真を交えたお話や住民が協力して避難所を運営した体験は、今後の震災における防災上非常に貴重な内容でした。

また、今回の調査期間では、広田地区の防災集団移転協議会からの依頼を受け、将来被災した低地に移植するために、平田半島の道路添いに自生する樺の植生調査を実施しました。



震災防災語り部 釘子明氏による講演

広田半島の自生樺の植生調査

この他、動く七夕、けんか七夕への参加や、住民の皆さんとの交流など、学生にとって都会ではできない貴重な経験をすることができました。



第1期合同調査チームのメンバー



第2期合同調査チームのメンバー

## Ⅱ 陸前高田市の仮設住宅における暮らしの概要

ここでは、今回の仮設住宅団地自治会長へのインタビュー調査から、現在の陸前高田市の仮設住宅における暮らしの概要を報告します。

### 1. 転出入の状況等

陸前高田市内の仮設住宅は、供給戸数 2,141 戸であり、その内、自治会長さんが把握している居住戸数は 2,024 戸（2013 年 8 月現在）となっています。これまでの転出戸数は、把握できた市内の仮設住宅 48 団地で 183 戸となっています。また、隣接する住田町の仮設住宅団地は、93 戸あり、昨年 8 月には高田町 33 世帯、気仙町 24 世帯が居住していましたが、本年 8 月までに約 3 割の世帯が転出しています。これは、陸前高田からの移動距離の長さも一因と考えられます。

市内の仮設住宅の転出世帯の内、自治会長さんが把握している自力再建は、132 戸で居住戸数の約 6.5%となっています。昨年 8 月の同調査では、55 戸（2.5%）ですので、かなり増加はしていますが、全体から見ると少ない比率と言えます。転入は、見なし仮設からの転入や世帯分離、市への派遣職員などの入居があります。

空き部屋は、住田町仮設が約 2 割となっていますが、各町の仮設では、5 戸～10 戸程度とまだ多数とは言えない状況です。これまで、集会室がなかった団地で集会室や子どもの勉強部屋として活用されている例がありました。空き部屋の活用については、「自治会として家族の状況を把握しているので、今後自治会の裁量で世帯分離などができるようにしてほしい」との自治会長さんの声もありました。

今後、中・長期的な視点で見ますと、転出世帯が増加していった場合の団地の再編や空き部屋の活用など、行政と団地自治会との十分な調整が必要になってくると考えられます。

## 2. 独居高齢者・子どもなど配慮が必要な人の状況

独居高齢者や要介護高齢者、障害者、子どもなど配慮が必要な人たちの状況についてうかがいました。

独居高齢者は、(一部去年のデータを参照している) 49 団地で、自治会長が把握しているのは、228 人と居住世帯数の約 1 割強となっています。小・中学校の校庭の仮設住宅では、10 人以上と多くなっていますが、1DKがない団地では、独居高齢者がいない団地も 11ヶ所あり、かなり違いがあります。全体的には、親族や近隣住民が声をかけたり、お茶飲み会に参加したり、友人同士の交流があったりと心配ない状況の団地が多いと言えます。しかし、今後このような高齢者が取り残されるのではないかと自治会長さんの声もあり、中・長期的な視点での関係者の連携した支援が求められます。

要介護高齢者は、自治会長さんが把握している方で 49 人となっています。その中でデイ・サービスセンターに通所している方もかなりいるようですが、現在の仮設住宅では、居室や風呂、トイレが狭く、要介護度が重くなるにつれ仮設住宅内での介護は困難になります。今後、バリアフリーのサービス付き高齢者住宅など要介護者の介護に配慮した住宅施策が必要と考えられます。

自治会長さんが把握している障害者数は、26 人となっています。特に顕著な課題は指摘されていませんが、ある知的障害者の父親が救急車で搬送され、以来自治会長が中心となって見守っているなどの例があげられており、専門機関と連携した対応が必要な場合もあることが考えられます。

子どもの状況については、自治会長さんが把握している人数は、未就学児が 130 人、小学生が 189 人、中学生が 132 人となっています。子どもの数は、団地の規模等によって相当の違いがあり、中には子どもが 1 人やいない団地もあります。全体的に、自治会長さんは、部屋の狭さによるストレスや、団地内での子どもの遊び場所や学習環境が十分でないこと、安全性にかなり配慮していることがうかがえました。ボランティア団体による遊びや学習支援活動も行われていますが、今後も子どもへの一層の配慮が必要と考えられます。

その他、アルコール依存症やピック病などによって、団地内で深刻なトラブルが発生し、自治会長さんが、非常に対応に苦慮している例もあり、今後の長期化を考えると、行政や専門機関と連携した個別的な対応が求められます。

## 3. 住環境の問題と改善住環境

団地の住環境については、「2年間住んでいてかなり慣れてきた」という声がある一方、「部屋が狭く荷物が増えてきて、布団が 1 枚しか敷けない」とか、「住宅のプレハブに隙間ができています」、また住棟に雨どいがないことや雨漏り、周辺の斜面崩壊の危険性など長期化に伴う問題が出ています。仮設住宅での暮らしがさらに長期化することを想定すると定期的な住環境と周辺環境の点検と改善が望まれます。

希望者にNPO団体がベランダを取り付けた団地や周辺に畑を借りて野菜を栽培している団地もあり、居住者には好評でした。

周辺環境では、街灯が少ないことや病院や通院の不便さをあげている仮設住宅も多く見受けられました。BRTやデマンドタクシーなど新たな交通システムも居住者に浸透していないとか、十分に利便性が確保されていないとの声も聞かれました。

復興事業の進捗にともない、平日農免道やアップル街道に工事車両が頻繁に行き交い、交通事故の危険性や渋滞などの問題が起こっており、信号の設置等の対策が求められています。

#### 4. 自治会活動の状況

現在の仮設住宅団地におけるコミュニティ形成の状況について、ある程度の傾向性が見受けられます。一つは、仮設住宅への入居が基本的に集落単位でなされ、仮設住宅においても元の集落の人間関係があり、相互の関係性とコミュニケーションが保ちやすい団地です。気仙町の小規模な仮設住宅や、モビリアの一戸建てを除く小友町、広田町、米崎町の一部の団地などがこれに相当します。

気仙町などでは、一部高台移転事業などの造成工事が始まり、今後の見通しが見えてきていますし、また、同じ集落内の住民ですので、今後の住宅再建などについて情報交換や話し合いがしやすい状況があります。

一方、居住者が地元の同じ町内や集落だけでなく、異なった居住地の世帯で構成されている団地は、竹駒町、横田町、矢作町、高田町、米崎町、小友町のモビリアの一戸建てなどにみられます。この場合、自治会活動などを通して居住者相互の交流とコミュニケーションを図っている団地もありますが、自治会長の事情や居住者自身が仕事等で多忙ということもあり、あまり居住者間の交流がない団地も見受けられます。このような団地では、今後、自治会長が交替したり、居住者の転居が盛んになった場合、残った居住者が孤立感を強く感じたり、相互の交流が途絶えたりすることも考えられ、外部の支援者が注意深く見守り、適切な個別的な支援を図っていくことも必要と考えられます。

実際に、市内の団地では、この1年間で自治会長が交替した団地が、13ヶ所と4分の1強となっており、この点からも今後の長期化にともない、自治会長の交替や不在の状況も生じることが考えられ、各団地における居住者間の交流や孤立している人がいないか注意深く見守っていく必要があるかと思えます。

また、自治会長さんへのインタビューを通して就任当初から元気で意欲的に自治会活動や居住者のお世話をしている方もいますが、その一方で、長期化にともない疲れが増し、中には入院された方もいらっしゃいました。今後のことを想定すると、自治会長の役割に負担感を持っている方には、仮設支援員の補完的な役割も重要になると考えられます。

## 5. 住宅再建・復興まちづくりについて

全体的に自治会長さんや居住者の皆さんの関心の多くは、今後いつ、どこに住むことができるのかということにあると言えます。気仙町の長部地区や広田町の防災集団移転事業に伴う造成工事が始まった地区などでは、建設費の値上がりや大工不足、消費税などの具体的なことが不安材料になっています。その一方、米崎町のように造成工事の着工が予定より遅れ、その理由が不明で不安に感じているとの声もあげられています。

今泉地区や高田地区では、区画整理事業が予定されていますが、高台への移転やかさ上げ地での再建、災害公営住宅への入居について、今後の具体的なスケジュールや費用面などから、明確に判断できない状況にある人が多いとの声もあげられています。

特に、高田地区では、元の居住地区の住民がばらばらに市内・外の仮設住宅に入居していることもあり、相互に情報交換や協議をする機会がほとんどなく、住宅再建や新たなまちづくりなどについての情報が十分に行き届いていない状況にあります。今後、住民が相互に情報交換し、新たなまちづくりのあり方について協議する場を設定するなど行政や外部支援団体の支援が必要と考えられます。

また、独居高齢者など社会的に弱い立場の人々が仮設住宅に取り残されるのではないかと声もあげられており、より個別的な事情に配慮した情報提供や相談・支援が求められると考えられます。

### Ⅲ 各地区の仮設住宅における暮らし

#### ■高田町の仮設住宅

##### はじめに

高田町には9団地、合計511戸の仮設住宅が建設されており、現在は約480世帯が入居しています。その内、約450世帯は震災前にも高田町にお住まいの方々です。高田町を東西に分けて、従前居住地が東側の住民は東側に建設された仮設住宅に、西側の住民は西側に建設された仮設住宅に入居している傾向がありますが、以前の行政区や町内会のまとまり毎の入居にはなっていません。鳴石（高田第一中学校仮設住宅、150戸）と長砂（高田高校第2グラウンド仮設住宅、148戸）の2ヶ所が飛び抜けて大規模な仮設住宅団地となっており、他は50戸以下の小規模な団地です。

##### 居住者の転出入

今回、高田町については、すべての仮設住宅でインタビュー調査を実施できました。この1年間の転出は9団地の総計で55戸、転入は44戸でした。転出は住宅の自力再建（39世帯、ほとんどが市内での再建）によるものが一番多く、次いで他市への引越し（7世帯）、他の仮設住宅への移動（4世帯）となっています。転入は市外に避難されていた方が戻られるケースが多く、他に市外からの応援職員の入居もあります。空き部屋は鳴石と長砂にそれぞれ10戸程あり、他の仮設住宅については空きが無いか、あっても1戸程となっています。

##### 高齢者と子どもの暮らし

独居老人が72人、要介護高齢者が9人、障害をお持ちの方が9人おられます。独居老人の多くはお元気で、親戚などが定期的に訪問されています。一方で実際に自分の母親が介護の必要な状態になり、仮設住宅から出ざるを得なかった会長の方から「介護が必要な状態になったら、仮設住宅では生活が難しい」との意見もありました。自立して生活ができなくなった高齢者は、仮設住宅を出ざるを得ない状況があります。

子どもは未就学児39人、小学生101人、中学生74人です。仮設住宅の中で生まれた子どもも、少なくとも5名お聞きしました。小学校および中学校への通学についてはスクールバスもあり、問題はないとのこと。ただ高校生については、「（大船渡市まで）親が車で40分くらいかけて送り迎えする」世帯もあり、それが負担になっている家庭もあります。また子どもたちは、仮設住宅内の通路で遊んでいることが多く、駐車場で野球をしている子どもとのトラブルもお聞きしました。

##### 住環境の問題と改善

住環境については、ある団地で、排水管に問題があり、トイレが詰まり、異臭がするとの問題をお聞きしました。また住宅周辺が暗いので街灯が欲しいとの意見が3団地からありました。ある団地では「夜に大雨が降った際に、住宅の裏手にある斜面から水が来ているかどうか見えないので、そこに街灯が欲しい」とのことでした。またもともと



十分な駐車スペースがなかった所に、入居者が新たに自動車を所有して台数が増えて困っているというお話も複数の団地からお聞きしました。

最近の変化では、太田および西和野で、今年度になってから大船渡市のボランティアの方に木でベランダを作ってもらい、大変に好評だとお聞きしました。

住民の方の買い物、通院に関しては、「初めは不便に感じていたけど、慣れてきた」という声も聞かれる一方、「足がないので病院に行くのに非常に苦勞する。(スーパーの)マイヤへの買い物も同様」という意見もありました。

その他、農免道沿いの山苗代(サンビレッジ)・中和野では、工事車両により農免道の交通量が増え、道路脇を歩いたり、横断する際に危険を感じるのとことでした(歩道や横断歩道、信号機がないため)。また栃ヶ沢でも「仮設住宅下の道路の交通量が多いのにも関わらず信号も横断歩道もなく交通事故の危険性がある」とお聞きしました。

### **自治会活動**

今回、インタビューさせていただいた各仮設住宅団地の会長の就任時期は、9つの仮設住宅の内、5つで2011年の入居当時から同じ方が自治会長を務めています。他に、2つで2012年度に就任、残り2つで2013年度に就任となります。会長として「特に負担は感じていない」「周りの人に支えられているので問題ない」と答える方がいる一方で、「本当は早く辞めたい」と会長の立場を負担に感じておられる方もいました。

鳴石と長砂、栃ヶ沢の3ヶ所では、総会・役員会などの会議があり、女性部などの部も置かれた組織だった自治会活動が行われています。

独立した建物で集会所があるのは、鳴石と長砂、栃ヶ沢の3ヶ所の仮設住宅です。この内、長砂と栃ヶ沢の集荷所は支援団体のセーブ・ザ・チルドレンが建てたものであったが、今年の8月に管理が陸前高田市に移管されました。また中和野、西和野、大田、大隅の4ヶ所の仮設住宅では空き部屋を談話室として活用しています。一方、山苗代(サン・ビレッジ)、大隅第2の2ヶ所の仮設住宅には集会所や談話室がなく「空き住戸が出たら集会場として使いたい旨申し出ているが、なかなか空き住戸が出ない」(大隅第2)という声もお聞きしました。

### **住宅再建・復興まちづくりについて**

高田地区では、大まかには(1)復興住宅への入居、(2)高台での再建、(3)従前居住地に近いかさ上げ地での再建の3つの選択肢があるのですが、インタビューを行った段階では、いずれの選択肢についても、はっきりとしたスケジュールが分かってはいません。「災害復興公営住宅については、新聞などで情報を得ている。また公営住宅マップも配布された。しかし、戸数なども決まっておらず、ざっくりとしか分からない。いつ募集かも分からない。そのため、どこに行くかなどは、まだ決められない」「高田町内に3つ大きな公営住宅ができるが、まだどの住宅に入りたいかなどの希望を住民たちはまだ決めていない」などの声がありました。復興住宅に入居される方の割合については「5割」「8割」などという数字が何人かの会長の方からは挙げられました。



また、高台移転やかさ上げ地については、何年度に住めるようになるかの見通しも立っていません。そのため「この仮設住宅では、いられる内は、いようと考えている。ここでずっと暮らしても良いという人もいる」という声も複数の団地から聞かれました。

「かさ上げを望む方と高台移転を望む方のどちらもいる。かさ上げの方が少数派である。どちらを望んでいる方も悩んでいる」「高台移転では鳴石団地近くが人気」「かさ上げ地での再建を希望するが、高台にも申し込む」「かさ上げ地で再建できるようになるまで、復興住宅に入居する」などの声が聞かれます。また従前地に近いかさ上げ地に再建を希望される方は、決して少数派ではないのですが、見通しが立たないため、復興住宅への入居や、高台への入居に流れつつある状況があるように感じました。

### **おわりに**

ある会長からは「最後まで残るのは力のない方。今仕切っているのは力のある方々なので、その人たちがでていったら取り残される」との懸念が表明されました。高田町は、陸前高田市の中心部で、都市的性格の強い地域であり、仮設住宅と地域社会の結びつきが弱いところがあります。また、高田町内の様々な町内会・行政区から各仮設にはバラバラに入居されているため、仮設住宅内部のコミュニティ形成にも限界があります。そのため、仮設住宅の生活が今後も続くなかで、疲弊し孤立する方々が現れることが懸念されます。

現在、高田町内の比較的規模の大きな仮設住宅ではしっかりと自治会運営がなされていますが、今後、仮設住宅を退去される方が増えていく中、自治会組織が崩れていくことが懸念されます。その際、社会福祉協議会の生活支援相談員、仮設住宅連絡会の仮設支援員などによる継続的な支援が重要になってくると思われます。

(文責：藤室玲治／東北大学)

## **■ 竹駒町の仮設住宅**

### **はじめに**

竹駒町では6団地272戸の仮設住宅が供給され、自治会はいずれも平成23年8月までに結成されています。自治会長は今年度に入り2団地で交代が行われ、全団地の半分にあたる3団地で当初就任された自治会長からの交代がなされています。

### **居住者の転出入**

竹駒町の仮設団地ではこの1年間での転出戸数が19戸あり、その9割以上が自立再建による転出でした。これは、高台移転だけでなく、従前住居の修理・改修等による再建が可能な竹駒町の復興方針が強く影響しているため、インタビューからもこうした再建・転出情報が多く聞かれました。他地区での再建では高田町での自主再建があげられています。

### **空き住戸の利用と管理**

空き住戸等、転出に伴う課題はあげられておらず、「今も仮設住宅が空くのを待つて

いる人がいるので、非居住住戸の利用を調整できればと思う」「世帯分離といった対応で居住環境が良くなるのならば、対応していこうと思っている」といった意見に象徴されるように、転出入に応じた対応に積極的に取り組む自治会長の意向が聞かれました。加えて「徐々に転出していく中で高齢者が最後まで残ってしまう恐れがある」「仮設住宅から転出した人の中に、移転先に知り合いがいない、日中家にいる高齢者の中には、誰も来ず、孤独感を感じている人もいる」といった転出が進む中での状況変化を心配する声も聞かれています。

### **高齢者と子どもの暮らし**

一人暮らしの高齢者や要介護高齢者の方に対しては日ごろから団地内で声掛けをするなど社協との連携で見守り活動が行われています。

竹駒町の仮設団地に住む子どもは小中学生が多く、中でも滝の里団地に集中しています。団地内での生活については「みんな仲良く遊んでいる」と話が聞かれる団地があるのに対して「外で遊んでいることはめったにない」「遊ぶ場所がなく運動不足気味」「震災前はみんな近所で遊んでいたが、仮設に入り遊んでいない」といった意見が聞かれる団地もあり、こどもの生活・遊び環境に大きな違いが生じています。

### **住環境の問題と改善**

住環境については「後からできた仮設なので、最初にできた仮設よりも性能が良い」と聞かれているように、供給された住宅性能に差があることが確認されています。一方で、多くの仮設でデッキや緑のカーテンなどの取り付けがボランティアの協力により行われ、環境改善がなされています。

竹駒町は仮設商店街が集中する地区ということもあり、「商店街まで歩いていける」と移動の足について特段の課題があげられることはありませんでしたが、団地周辺の住宅地工事の増加や復興事業に関連して仮設団地周辺の交通量が増加してきていることから、「大型車両の通行に危険を感じる」といった新しい課題が出てきています。

### **自治会活動**

竹駒町の仮設団地では会長の他、各棟に輪番制で班長を決めて仮設の運営を行っている団地が多くあり、「班長を全ての世帯が担当することは全体としてもよい」という意見が聞かれています。全ての仮設でボランティアのイベントを活用した交流が行われており、これに加えて、自治会便りを作成するなど、独自の活動を行う団地もあります。また、こうした仮設団地の自治会活動だけでなく、竹駒町や高田町川原地区の被災前のコミュニティ維持を目的とした集まり・交流会の展開がはじめられていることは大きな特徴となっています。

おわりに

竹駒町の仮設住宅には竹駒町、気仙町今泉地区の被災者が多く居住されており、「竹駒町の人はそのまま嵩上げもなく建て替え可能。ただ堤防等がないため不安な面も」「気仙町には住宅が建てられないため、気仙町の人退出がなかなか決まらない」と地域の

復興状況によって再建の判断が分かれる状況が、より顕著になってきています。

(文責:藤賀雅人/目白大学)

## ■ 横田町の仮設住宅

### はじめに

横田町では5団地218戸の仮設住宅が供給されており、完成当時に自治会長に就かれた方は堂の沢団地を除いて全て交代されており、こうした交代は横田町仮設の大きな特徴といえます。

### 居住者の転出入

この1年間で横田町仮設から約1割の方が転出しています。その内、自力再建は約5割となっています。転出先としては高田町が多くあげられ、従前の高田地区住民の多い横田町仮設の特徴がみられます。また、元の居住地域を離れて高田町を再建場所としたという意見も少なくありませんでした。数世帯ではありますが、仮設団地のある横田町への再建も見られています。

### 空き住戸の利用と管理

特段、転出入に伴う課題があげられることはありませんでしたが、2団地12戸で「実質的な居住がなされていない」という状況が聞かれました。こうした状況は「ケア施設での療養や親族の看病のため」といった事情から生じている場合もありましたが、多くは再建に向けた居住地の変化からくるものでした。自治会長からは、こうした住戸は「団地管理の面では空き室として扱うこともできず、判断に困っている」との声も聞かれています。一部の仮設団地では転入を制限することとなったとの話も聞かれ、今後の仮設住宅解消に向けた兆候が聞かれたのも特徴的な点です。

### 高齢者と子どもの暮らし

一人住まいの高齢者は10人(世帯)と横田町仮設全体ではそれほど多くはありませんが、一部で「足の不自由な方がいる」といった話や「一人暮らしではないが70歳以上の方は多く居住されている」といった意見が聞かれています。未就学児が21人と横田町は小さな子どもが多く、仮設入居後の出産も聞かれています。子どもの遊び場としては、仮設団地の空きスペースや集会所、近隣の学校・学童保育があげられ、その他には「近くに広い遊び場はない」といった課題があげられています。また、「団地外から子ども達が遊びに来る」団地もあれば「同世代の遊び相手がいない」団地もあり、子どもの生活状況・環境に違いが見られています。

### 住環境の問題と改善

「住宅のプレハブに隙間ができています」といった仮設住戸の劣化や性能に対する課題が聞かれ、欠損部分の修復は県への依頼で対応してもらっているが、多くの場合は仮設住宅だからと我慢がなされている状況にあります。仮設団地内の環境を見れば、「大雨で法面が崩れる」状況も見られています。駐車スペースについては、仮設団地の規模の

大小で状況が異なり、大規模な団地では隣接する学校に配慮して「敷地外に駐車場を借りようとしたこともあった」といった意見が聞かれた一方で、小規模な団地では「駐車スペースも十分なので仮設団地の敷地の空きスペースは自由に菜園として活用して良いこととしている」といった意見も聞かれています。その他、「車がないと生活しにくい」「横田地区には商店がないでの買物場所への距離が遠い」といった市中心部から距離のある横田町特有の課題があげられています。

### **自治会活動**

20世帯以上の仮設団地では年に1度の総会が開かれており、久連坪団地では「班長会は8人の班長と会長・副会長・事務局長・健康推進委員・会計・事務2人の7人、計15人に呼びかけて開催している」といった自治会としての体制が聞かれています。総じて支援団体等のイベントの活用や社協との連携など、自治会の負担になりすぎない程度の活動を心がけているとの意見が聞かれ、盆踊り、お餅つき、花見などの親睦会を開催している団地がみられています。また、団地内の畑で作った野菜を交換し合うといった交流も聞かれました。自治会長の負担として「支援等を配るのが大変な面もある」といった意見が出されており、班長会を設けている久連坪団地では「当番制の班長に負担が大きくなるようにと決めていて、回覧板を回す水曜日以外は普通の居住者と同じようになるように気をつけている」と自治会運営に対する配慮の意見が聞かれています。

支援に関しては「ボランティアやNPOなどの関与が少なくなってきた」「物資の支援は今はいらないが、断れない」といった意見が出され、支援活動をしてもらっている団体の「時間つぶしにつき合わされているような状況になっている時もある」といった問題が聞かれています。仮設住宅連絡会に対しては「自治会長の負担を減らしてほしい」「団地内でのトラブルの仲裁に入ってほしい」といった期待・要望が寄せられています。

### **おわりに**

横田町では従前、高田町・気仙町今泉地区に住まわれていた方が多いため、住宅再建の見通しが不透明になっています。そんな中、再建・復興について「市長を呼んで、住宅再建の話をしてもらった」という団地がある一方で、現在の関係を壊さないために「あえて住宅再建の話はしない」という話も聞かれ、複雑な状況が垣間見えています。

(文責:藤賀雅人/目白大学)

## ■ 気仙町の仮設住宅

### はじめに

気仙町には今泉地区に1つ、長部地区に8つ、計9つの仮設住宅が建設されています。長部小学校に建設された牧田第一仮設住宅（44戸）と谷戸の集落の最奥に位置する上長部仮設住宅（41戸）は中規模な仮設住宅ですが、その他は民有地を利用した7～22戸の小規模な仮設住宅です。9つの仮設住宅は概ね集落ごとに建設されており、入居者も周辺集落の方が大半であるため、仮設住宅内のコミュニティや周辺地域との関係は良好です。長部地区では防災集団移転事業による宅地造成が進められており、住まいの早期再建に向けた期待が高まっている状況にあります。

### 居住者の転出入

インタビュー調査を実施できた6団地（上長部、牧田第一、牧田第二、二日市第一、要谷第一、町裏）では、この1年間の転出は12戸、転入は4戸でした。転出は住宅の自力再建・リフォームによるもの（11戸）のほか、お孫さんの近くに住むために上長部仮設住宅から二日市第一仮設住宅に転居した例もあります。転入は、3人家族で介護ベッドを2つ入れるために息子さんが空き室に入居した世帯分離によるものや、学生や出稼ぎに出ていた方が戻ってきたものです。転入者はみな元々の知り合いであるため、コミュニティの面での問題は生じていません。

### 高齢者と子どもの暮らし

6団地で独居老人が17人、要介護高齢者が2人、心臓疾患や人工透析による障害者が2人います。若い人は昼間は仕事があるため自治会としての見守り活動はありませんが、生活支援相談員や民生委員が定期的に見回っているほか、仮設住宅ごとにラジオ体操や高齢者の自主的なお茶会などで安否確認を行っています。また、高齢者や障害者の中には元気な人たちもおり、「高齢でも畑仕事に従事している人」や「心臓に障害がありながら一人で自宅を建設している人」（町裏）もいます。

子どもは全体的に少なく、6団地で未就学児3人、小学生2人、中学生6人です。子どもたちの主な遊び場は気仙小学校（旧長部小学校）です。小学校には遊具もあるため格好の遊び場ですが、「仮設住宅内を子どもが自転車で走るため危険」（牧田第一）といった側面も指摘されています。また、長部コミュニティセンターにNPOが週2回ボランティアで勉強を教えに来たり、町裏では夏休み中に区長（自治会長）が子どもたちを集めて太鼓を教えるなどの取り組みも行われています。

### 住環境の問題と改善

仮設住宅での暮らしについては、いずれの仮設住宅においても「2年経ったのもう慣れた」との発言があり、昨年調査で課題とされた風呂の追炊機能や物置、棚の設置などが実現されたこともあって、住宅についての改善要望はあまり聞かれなくなりました。しかし一方で、この夏の多雨を反映して、住棟に雨どいがいないことの問題や駐車場の水はけの悪さ、周辺の斜面崩壊の危険性や不安などが、新たな課題として指摘されて

います。また、仮設住宅での暮らしの長期化に伴い家財道具や自動車台数も増えており、住宅の狭さや駐車スペースの問題も改めて指摘されています。

買い物については、食品や日用品はスーパーの移動販売や送迎バスなどの利用で対応していますが、電化製品などは自動車で気仙沼か大船渡まで出かけなければならず、自動車のない人には不便な状態が続いています。病院への通院には、バスやBRT、社会福祉協議会による送迎サービスが利用されており、デマンド交通は事前の予約が面倒なためあまり使われていないそうです。

その他、国道沿いの二日市第一仮設住宅では復旧・復興工事のダンプカーの往来が激しく子どもの通学の危険性が指摘されており、周囲に人家が少ない町裏仮設住宅では街灯が少なく暗いなど、仮設住宅ごとに立地条件の特性を反映した独特の問題を抱えています。

### **自治会活動**

いずれの仮設住宅でも、自治会としての組織的な活動はあまり行われていません。住民の親睦会についても、中規模な仮設住宅である上長部や牧田第一、3つの仮設住宅が隣り合って建設されている二日市（第一～第三で計62戸）では社会福祉協議会によるお茶っこ飲み会の定期開催のほか、ラジオ体操（上長部）、花見、花火大会（二日市）、補助金を活用した温泉旅行やBBQ（牧田第一）などが行われていますが、小規模な仮設住宅では定期的な取り組みはなく、近隣の仮設住宅の行事に参加させてもらったり（牧田第二）、個々の住民の自主的な取り組みに委ねられています。

なお、集会所が建設されているのは上長部仮設住宅と二日市仮設住宅（第一～第三の3つの仮設住宅で共用）のみで、牧田第一仮設住宅は隣接する長部コミュニティセンター、要谷第一仮設住宅は近隣の要谷公民館や空き室利用の談話室、町裏仮設住宅は区長（自治会長）の自宅跡地に住民が自力で建設した集会施設「積み木の家」を拠点にコミュニティ活動が行なわれています。牧田第二仮設住宅は集会所等がなく、共用の備品も自治会長宅に保管している状態です。

外部支援は「震災直後に比べて、ボランティアの数が100分の1くらいに減少している。」（牧田第一）という指摘があるくらい減少してきており、以前は頻繁に通っていたNPO団体も組織改編や予算の都合などにより、最近はあまり来なくなったそうです。

### **住宅再建・復興まちづくりについて**

仮設住宅の住民は「家を流された方が多く、高台移転のことで頭がいっぱい。」（二日市第一）の状態とのことです。長部地区では集団移転事業が進んでおり、多くの人は移転先も決まり他地区に比べて早期の住宅再建が見込まれますが、それでも「防災集団移転事業が非常に遅れているから、とにかく早くして欲しい。」「仮設住宅の住民には高齢者が多く、体も弱って来ているので早く仮設から移転したい。」という声が多く、仮設住宅で聞かれます。住宅再建にかかる建設費の値上がりや大工不足、消費税増税などを心配する声もあります。また、長部地区への公営住宅の早期建設を望む声もあります。

高田町で公営住宅を建設中ですが、「高田に移りたい人は少ないので、みんな長部地区にできるのを待っている。」(上長部) 状況のようです。

今泉地区は「区画整理の案が出ているため、住民はなかなか住宅再建に取り組めない。」状況にあります。区画整理を待たずに積極的に自力再建に取り組む人たちがいる一方で、「自主的な高台移転ならば60軒ほどが来年から着工できる状態になっているが、実際は10軒ほどしか希望がなく、積極的に今泉に戻ってくる人は少ない。」(町裏) との見方もあります。

### おわりに

気仙町では、概ね集落ごとに仮設住宅が建設されており、住民の多くは周辺の集落から入居した元々の知り合いであるため、「みんな家族のようなもので、他人という感じがしない。」(要谷第一) という声もあるほど、住民相互の気遣いや見守り合う関係が維持され、良好なコミュニティが形成されています。高齢者や障害者の孤立などの問題は生じておらず、周辺地域との関係も良好です。

長部地区では集団移転事業が進んでいることから「仮設住宅での暮らしもあと数年」という意識もあり、現在の仮設住宅の暮らしに様々な不自由さを感じつつも徐々に「自立しよう」という気運が高まっています。そのため「仮設住宅の改善よりも住まいの早期再建」が目指されています。

今泉地区においても、住宅再建の現実的な見通しは難しい状況にあるものの、現在の環境の中で少人数であっても震災前と同じような地域の取り組みを展開し、自立的な暮らしと地域社会を取り戻そうという積極的な意欲が伺えます。

(文責：神谷秀美／(株) マヌ都市建築研究所)

## ■ 米崎町の仮設住宅

### はじめに

米崎町には、8ヶ所の仮設住宅団地が設置され、米崎小が60戸、米崎中(現高田東中)が89戸と比較的戸数が多くなっていますが、残りの団地は、佐野40戸、西風道36戸、和野18戸、堂の前13戸、和方8戸と中・小規模の団地がアップル通りの上下と、農免道周辺に設置され、広いエリアに散在しているのが特徴です。インタビューは、高畑を除いた7団地に自治会長や奥様、居住者の皆様に実施することができました。自治会長さんは、全員男性で入居当初から就任された方が6人、今年の4月から就任された方が2人、西風道と和野の会長さんは、高田町の出身です。

### 居住者の転出入

住戸総数は、292戸となっており、高畑を除いて、転出は、30戸とのことであり、その内自力再建は、18~19戸とのことです。居住者の元の居住地区は、地元の米崎が約6割強となっていますが、高田町も2割強となっており、残りは、気仙町、小友町、広田町、その他が若干となっています。転入は、やはり高畑を除いて約15戸とのことで、市へ



の派遣職員が 10 戸、みなし仮設からの入居が 4 戸とのことです。空き住戸は、6 戸とのことです。

### **空き住戸の利用と管理**

転出入の課題は、特になしとの回答がほとんどでしたが、「部屋が狭く、三世帯以下は分離できないとされているが、空き住戸の活用について、居住者の状況を把握しているので、自治会にある程度の裁量をまかせてほしい」との声がありました。

### **高齢者と子どもの暮らし**

独居高齢者は、自治会長が把握しているのは 43 人で、世帯の 2 割近くとなっていますが、近隣等で配慮しており、孤立している人はあまりいないようです。しかし、救急車が 2 回出動した仮設や昨年、熱中症で死亡した方が死後 2 日目で発見された例があり、長期化にともない今後もさらに注意が必要と考えられます。

要介護高齢者が 8 人、障害者が 2 人、障害児が 1 人で、要介護高齢者は、デイサービスを利用している方が 7 人います。また知的障害がある人がいて、父親が救急車で搬送され、自治会長さんが中心となって様子を見ていることです。

未就学児は 27 人、小学生が 35 人、中学生が 7 人で、米崎小では、学校のジャングルジムと滑り台等の遊具や、ボール遊びや駐車場で自転車の水遊びをしているとのことです。高田東中では、駐車場で自転車やかけっこをしており、自治会としてカブト虫・クワガタの採集、星空教室、柔道教室、将棋教室、花火大会などの行事をしています。小・中学校以外の仮設では、遊ぶ相手と場所がないので、家の中か駐車場で遊ぶことが多いとのことです。子どもが遊ぶ際には保護者が注意をし、一人だけで遊ばせないようにしている団地もありました。

その他、配慮が必要な人について、ある仮設では、騒ぎを起こす人は限られていますが、騒ぎの件数が増えており、自治会長さんが対応しているとのことです。また、ある団地では、アルコール依存症の人やピック病と想定される人がおり、自治会長さんが対応に非常に苦慮されているとのことで、長期化にともないこのような例が増えた場合の行政や関係機関と連携した対応策が求められます。

### **住環境の問題と改善**

住戸・住棟では、子ども達の勉強部屋がないことに対し、空き住戸の一部を勉強部屋として使用している例や物干し竿が高いとの声に、希望のあった戸には低くした、ベランダを設置したなどの改善点があげられました。しかし、依然として床下の水たまりや、日当たりが悪くカビがひどい、雨音がひどい、ベランダがない、居住スペースの狭さなどの問題があげられました。

住棟外では、花や畑の苗をボランティア団体等に提供してもらい、花や畑での野菜などの栽培をしている団地や、仮設のグラウンドができ、子ども達が運動できるようになったとのことです。駐車場の不足の問題があげられた団地もあり、警察の許可を得て、公道に駐車している例があげられました。

生活環境上の課題としては、交通の問題があげられ、BRTの停留所が遠いことや時刻表などの情報が住民に行き渡っていないこと、デマンドタクシーの内容が不十分との指摘がありました。また、トラックが増え交通量が増しており、県道38号線に出るT字路に信号をつけてほしいと要望しているが実現していないことがあげられました。

### **自治会活動**

最も組織的に活動を行っている団地は、米崎中で班長会を月に1回行っており、班長会で自治会活動のほとんどを決定しています。居住者の特技や関心を活かした様々な交流活動が活発に行われています。米崎小では、役員18名で他に女子会があります。その他の小規模の団地では、居住者が仕事等で多忙なこともあり、ほとんど自治会長に一任されている状況です。

### **住宅再建・復興まちづくりについて**

米崎の住宅再建については、8月に高台移転の造成工事が始まると聞いていたが、開始されておらず、その事情が不明で不安に思っているとの声や、米崎中仮設の自治会長さんからは、「仮設住宅でのコミュニティの形成が、次のまちづくりの際にも大きなエネルギーになると考えて活動している」と、仮設住宅でのコミュニティ形成を、地域再生のバネにするとの大変前向きな姿勢がうかがわれました。

### **おわりに**

自治会長さんへのインタビューでは、大変に前向きにまた工夫して自治会の運営を行っている自治会長さんがいる一方で、十分な引き継ぎも行われず負担に感じている自治会長さんもあり、その負担感に大きな差が生じていることが分かりました。今後の長期化に向けて、深刻な課題が生まれることも想定されますので、個別の状況に合った支援策が求められます。

(文責:宮城 孝/法政大学)

## **■ 広田町の仮設住宅**

### **はじめに**

広田町には大小3つの仮設住宅が立地しています。最大の仮設住宅は、広田水産高校跡地にある大久保第二仮設住宅124戸、ついで広田小学校にある大久保64戸、長洞団地25戸です。長洞は集落の半分が被災し、仮設住宅への移転によるコミュニティの分断を避けて住民の意思によって震災前の居住地の近隣に仮設住宅を整備しました。他の地域は、広田町に限らず他の地域からの被災世帯も居住しています。仮設住宅居住者の最たる願いは住宅と生活の再建ですが、さまざまな理由により仮設居住は長期化しストレスが蓄積しています。

## 居住者の転出入

この一年間での転出世帯として把握されているのは、広田町全体では、12世帯で、このうち自力再建は10世帯、2世帯は他市への転出です。この仮設住宅別の内訳は、右表のとおりです。大久保第二仮設住宅でも、転入転出、自力再建はありましたが、規模が大きく転出入に

表 転出世帯数

	大久保第二	大久保	長洞
転出	不明	10	2
自力再建	不明	8	2

際して、全戸に知らせることはなく、自治会長に対して市から住民の異動について知らせがあるわけではないため現在数値が把握されていません。

## 高齢者と子どもの暮らし

高齢者のみの世帯は、もともと三世帯居住でしたが仮設住宅の住戸が狭小であるために世帯分離したものが少なくありません。このため、孤立している一人暮らしの高齢者はあまり見られません。仮設からデイサービスに通う高齢者がいます。家族が留守の時には、近所の人が見守ってくれるなど地域の中で見守りが確立しています。一方、車を持っていない高齢者は、通院や買い物などの不便を感じていますが、最近ではバスや販売車などが定着し、「バスが来るようになって家族に頼まなくても自分で通院できるようになってうれしい」という声が聞かれました。日常生活では、年配の女性を中心に、集会所に集まって手芸などを行っている姿が見かけられました。

長洞では、高齢者を含む女性たちが、自主活動グループ「なでしこ」を立ち上げ、広田漁協から仕入れた海藻や手づくりの柚餅子などの販売、震災の語り部、スターディツターの受け入れなどを行っています。

子どもは、住戸内では、狭く壁も薄いため「暴れるな」「大きな声を出すな」「静かに」と注意を受けており、伸び伸びと遊ぶ機会がありません。仮設住宅地内は、駐車場があるためこれまでに事故はないものの子どもが遊んでいると危険です。また、敷地内は砕石がまかれており、転ぶとけがをしやすい状態です。真夏は暑いため子どもも戸外では遊びません。クーラーの効いた集会所でパソコンを使ってゲームをするなどしています。

住戸が狭いため子どもも大人も互いの家を訪問することは少ない様子です。代わりにボランティアなどによる行事などがなくても、高齢者も子どもも集会所を集いの場、あるいは遊び場として活用しています。

## 住環境の問題と改善

過去の住環境改善についてしてみると、3団地すべてにおいて、屋根のひさしや風除室、風呂の追い炊き機能といった気候風土に適応するための改善はすでに1年目に実施されました。2年目となった今年の最も大きな住環境改善は、大久保第二仮設の公共水道の敷設と側溝の整備でした。仮設住宅建設当初、山の水による簡易水道を敷設していましたが水が濁り、企業から浄水器の寄付を受けるなどして対応していましたが、今年には水源が枯渇し市の上水道を敷設することになりました。また、同団地内の溝に蓋がな

く危険な状態であったので蓋を設置しました。

### **自治会活動**

自治会活動は、主に市からの様々な連絡調整です。地域における活動は、震災以前の集落との関係が強いです。大久保では、10 班に分かれ、各班の班長を集めた連絡会議を実施しています。大久保第二では、自治会が主に市からの連絡を回覧板などで流し、情報連絡を行っています。長洞は、震災以前に暮らしていた集落との関係性を重視し、あくまで長洞の一部であることを主張しています。このため、長洞仮設住宅は、公式には自治会を立ち上げていませんが、市からの情報の伝達は実施しています。

### **住宅再建・復興まちづくりについて**

住宅再建は、3つの仮設住宅で共通して防災集団移転促進事業による高台への移転事業がいくつか検討されていますが、3箇所が事業着手しています。専門家の支援があるグループでは住民の意見を反映してかなり具体的な案が描かれてきており、住民の生活の希望につながっています。事業上の課題は、敷地の確保の困難性と市の災害公営住宅整備方針と住民ニーズとの相違が大きいことです。

長洞では、都市計画、法律などのプロ集団によって構成されているNPO復興まちづくり研究所が、具体的な住宅再建計画の立案、なでしこの事業などを含め住民の意思決定と行動を助ける支援を行っており、この支援が地域のエンパワメント（主体形成）に大きく影響しています。また、住民、専門家がブログなどを全国に向けて発信しており、これによって外部からの新たな支援が入りやすくなっています。

### **おわりに**

ある自治会長から「年寄りでも子どもでもコミュニティの中ではだれでも役割がある。」という言葉がありましたが、このような視点を地域の復興に活かしていくことこそが誰もが参加できる復興の原点であると考えます。

さらに、今回調査によって、住宅及び生活再建に対するコミュニティ単位での支援の重要性が改めてわかりました。特に住宅や事業の再建に関する専門的支援や資金が地域に循環する仕組みが必要と考えられます。このためには、コミュニティ単位でまとまって意見交換したり意思決定を行う基盤が必要であると考えられます。この意味で、仮設住宅において集落としてまとまっている長洞は、外部からの専門的支援が入りやすい状況であると考えられます。今後地域の再生に向けて、住宅再建、生活復興の様々な側面からの支援が重要であり、多様な専門家及び非専門家によるコミュニティ単位での支援の方法論を確立していく必要があると考えられます。

(文責：仁科伸子／東京福祉大学)

## ■ 小友町の仮設住宅

### はじめに

広田半島に位置する小友町は、2011年4月～5月に仮設住宅の建設に着工しました。内訳は公営地1カ所に木造一戸建てを108戸、長屋式を60戸、また、民営地4カ所に長屋式を114戸(小友町全体で仮設住宅合計282戸)供給しました。

仮設住宅団地の自治会は、瀬沢(モビリア)・矢の浦・三日市・柳沢・賤当の5団地のうち、柳沢地区は置いていませんが区長が団地内をまとめています。それ以外の4団地では自治会を置き、推薦、輪番制によって選出された自治会長が2011年から2013年の間に就任しました。

### 居住者の転出入

小友町の5団地は、これまでに約1.5割(35戸)が新築住宅購入など、住宅の自主再建によって転出し、約0.6割(16戸)が空き住戸となっています。転出先は被災前の住所市、他市と多様です。転入は、約0.6割(16戸)で主に職場から遠いことや世帯分離によるものです。また、賤当団地では研修医の宿泊施設として使用されています。

### 空き住戸の利用と管理

矢の浦・柳沢の2団地では空き住戸を集会所として、談話室や話し合いの場、住宅再建の勉強の場、女性たちの作業の場などに利用しています。空き住居の管理は自治会長・区長が行い、集会所のクーラーを利用して涼むよう呼びかける、親戚来訪時の宿泊施設として検討するなど利用の工夫がされています。

### 高齢者と子どもの暮らし

小友町の仮設住宅は、独居老人22人、要介護高齢者が14人います。みな、配食サービスやデイサービスを利用して元気に生活をしています。しかし、住居内が狭く運動量が少なくなったため足腰が弱った人がいます。三日市団地では、閉じこもりにならないよう住民が木陰に机やベンチを設置、談話スペースを作りました。

子どもは未就学児が12人、小学生21人、中学生11人がいます。瀬沢(モビリア)仮設はキャンプ場だったので、子どもたちは遊具を使ってのびのびと遊んでいました。一方、他の4団地では、仮設内の道路や空き地で遊ぶなど遊び場が不足している状況が示されました。また、瀬沢(モビリア)仮設に公益法人シャンティ国際ボランティア学会(以下、SVA)、アジアの友を支援するRACKの支援により2012年4月集会所に併設した図書館がオープンしました。管理は自治会が行い、図書室の運営をSVAが行っています。

### 住環境の問題と改善

2012年にお風呂の追い炊き給湯器、窓の二重サッシ、ベランダ、車いす用スロープ(必要な世帯のみ)、物置、街灯の設置など仮設住宅におけるいくつかの改修工事を行いました。住居内は狭く結露や天井が下がってきたなどの状況がみられますが、「移転がきまっているので気にならない」、「4.5×2部屋、台所、トイレなので狭いが慣れた(二人なら快適)」などの声が聞かれました。瀬沢(モビリア)団地以外の4団地では、

もともと同じ集落の住民同士で以前から仲が良く、住環境の課題は話し合いで解決しています。例えば、賤当団地では駐車場の利用方法を話し合い、くじ引きで場所を決め、来訪者用のスペースも確保しました。

### 自治会活動

小友町の矢の浦・三日市・柳沢・賤当の4団地は、ほとんど地元の集落の住民が生活しています。顔見知りでお互いに気にかけていることや草刈や行事への参加を呼びかけるなどスムーズな自治会活動が行われています。一方、瀬沢(モビリア)仮設は、高田町、小友町、気仙町などから住民が168戸に居住しています。そのため、陸前高田八起プロジェクトのスタッフ(6名)が住民への支援をしています。小友町の仮設住宅団地では、住民の親睦を図るためにお茶会、芋の子会、焼肉パーティ、お花見、忘年会などが催されています。外部から遠野まごころネット、Youstth For 3.11(学生団体)、Save the Children、NICCO、アメリカーズ(畑プロジェクト)、黄金ネット、山里ネット、慈愛福祉学園(花いっぱい運動)など交流とボランティアによって自治会活動を支援しています。瀬沢(モビリア)仮設では年間210ものイベントが開催され、自治会長はこれらのイベントを他の団地に紹介したいと考えて仮設住宅連絡会を立ち上げました。

### おわりに

小友町の仮設住宅には小友・高田地区の被災者が多く居住しています。「早く仮設から移転したい」と考える住民は多く、そのために「各家庭に応じた具体的な支援策が知りたい」、「大工さん(の賃金)や建築材料も値上がりしている」「小友の建築様式は他地区と異なるので心配だ」など不安を抱えています。中には「移転が決まって心に余裕が生まれた」ものの「自分の家族だけが行っていいのか」と複雑な思いを持つ住民もいます。

(文責：染野享子／法政大学)



段差をつけた仮設住宅(賤当)



玄関を改良した仮設住宅(三日市)

## ■ 矢作町の仮設住宅

### はじめに

矢作町は、陸前高田市の最西部に位置し、8つの町の中でもっとも面積が広い地区です。矢作町仮設住宅は5つの仮設団地から構成され当初153戸が供給されました。現在（2013年8月）の居住戸数は140戸（91.5%）で今も当初の9割を超える世帯が生活を続けています。空き家はほとんどなく、3部屋あるすこし広めの仮設住宅もあることから別の仮設住宅から移ってきた人もいます。矢作町の仮設住宅の特徴として(1)気仙町出身者が50%超、次に高田町出身が30%ほど、矢作町出身が10%程度、と出身町が混在している、(2)5つある仮設団地は平均20-40戸と小規模団地から構成されている、(3)高齢者が多く、若い世代の居住者は少ない、(4)5団地のうち、学校の敷地内が2、他は交通の不便な奥まった土地(民有地等)に建設されている、(5)高齢者が多く、高台移転・住宅再建の目途が立っている人はきわめて少ないなどが挙げられます。

### 居住者の転出入

矢作町の5団地では、この1年間での自力再建は1戸(内陸、一関市)にとどまり、元の自宅の修繕完了での転出も3戸のみ。他は他県からの派遣職員の転入、帰任によるもので、転出入に大きな変化はありません。

### 空き住戸の利用と管理

前述の通り、矢作町仮設では住民の転出入の変化が少ないため、昨年度中に多くの団地が空き家を談話室に転用しました。同じ仮設内の空き家に大家族が1世帯借りたいとの申し出がありましたが、矢作町仮設の管理は県、市であり、市から、空き家分は公募する、との回答で本希望は却下されました。

### 高齢者と子どもの暮らし

全140世帯のうち、独居老人世帯は11で1割程度です。ほとんどが同じ仮設団地内に親族がおり、見守り体制があります。15歳未満の子どもは41名います。しかし自治会長さんらは70歳代が多いこと、子育て世代の世帯数が全体では非常に少ないこと、日中は仕事で子どもを実家に預けて仮設には寝に帰るだけ、という世帯もあり、子どもの遊び場については、団地内の通路や駐車場をよく遊んでいるが危険と思うことはあまりない、子どもの数が少ないので大きな問題にならないというコメントにとどまりました。

### 住環境の問題と改善

風除室を設けても、網戸がないために靴の中に蛇、蛙が入っていて驚いた、という声がありました。結露や雨漏りの問題、屋根がないために雨音や鳥の歩く音などに悩まされている団地も多く、軒先が狭く働く世代では洗濯物の室内干しが常態化している、との報告もありました。県や市に連絡しても具体的対応がないため自分達で修繕し、工夫をして乗り切っています。大きな問題となりつつあるのは、仮設住宅での生活が長引き、



生活用品が増えて、一間に1つ布団を引くのが限界になってきた、押入れに布団を入れる空間がなくなってきた、という声がありました。高齢者にとっては怪我防止のためにベッドが不可欠であり、狭いながらもベッドを入れた世帯もあります。またペットを飼い始めた世帯もありますが、ペットについては定めがなく、不満を感じている世帯もあるのではないかと心配する自治会長もいました。矢作町の仮設団地は多くが小規模で奥まった場所の所もあり、買い物バスや移動販売が来ないところも多く、不便さに不満をもつ住民は多くいます。当初想定された以上の長期の仮設住宅暮らしで生活空間がさらに手狭になる、等新たな住環境の問題が生じて来ています。

### 自治会活動

2年がすぎて、自治会長が交代し始めているところがでてきています。高齢者が多く、小規模の団地であるために中高年の住人同士の交流は活発で、自治会長・区長の目が行き届いている団地が多いといえます。またイベントも外部からの物資配給等の支援も減って来ているとはいえ、総じて「こうした小規模の町外れの仮設住宅に来てくれるのはありがたい」という好意的な回答が聞かれました。数世帯を担当する班長は1-2ヶ月交代で負担を軽減し、重要な回覧板をまわすときに安否確認を兼ねて見回る自治会長もいます。また複数の仮設団地で男性の自治会長を傍で支える元気な中高年の女性の1-2名の副会長格の存在があり、会長とともに仮設住宅内のコミュニケーション改善のための活動や情報収集に活躍しています。ただ自治会長さんは70歳代の高齢者が多く、日中は不在となる子育て世代の世帯との交流の困難さを感じている人もいます。

### おわりに

「住宅再建後、また新しい近所づきあいを始めるのは気が重い。」というコメントが複数の住民から聞かれました。矢作町仮設は住宅再建の見込みが立っていない世帯が多数で、数年はこの仮設に住むだろう、と思っている人も少なくありません。「外部支援が減っても、仮設住宅内の住民同士の結びつきを強くするイベントや催しを継続し、仮設住宅内のコミュニティを更に良くしたい。それが自分達らしい自立でもある。」という自治会長発言に矢作町仮設住宅らしさが滲んでいるともいえます。

(文責：崎坂香屋子／中央大学)



## ■ 気仙郡住田町の仮設住宅

### はじめに

陸前高田市に隣接する住田町は、震災 11 日後に木造一戸建ての仮設住宅を町有地 3 カ所に全 93 戸を供給しました。火石・本町・中上の 3 団地の自治会はいずれも平成 23 年 7 月までに結成されました。その時に選任された自治会長が継続してその役を担っています。

### 居住者の転出入

住田町の 3 団地は、この 1 年間で約 3 割が住宅の自主再建等で転出し、約 2 割が空き住戸になっています。昨年度調査では、木造一戸建ての住環境を求めて、陸前高田市内の仮設住宅からの転入者がいましたが、仕事場のある陸前高田市との往復移動時間と燃料費がかかるため、陸前高田市内の仮設住宅へ転出した世帯が見られました。住宅を自主再建した転出者の中にも、住田町の環境を気に入ったけれども、通勤の負担も考えて陸前高田市内に戻った世帯もいました。

### 空き住戸の利用と管理

住田町の仮設住宅団地では、高校生以上を大人として扱い、1 住戸の居住者のうち大人が 4 人以上の場合、申し出により団地内空き住戸に分居をすることが認められており、5 戸が分居住宅になっています。また、4 戸（うち中上団地は 2 戸）が団地居住者の談話室として利用されています。

### 高齢者と子どもの暮らし

住田町の仮設住宅は、2 人以上が入居条件となっているので、独居老人はいません。15 歳未満の子どもは合計すると 23 人います。子どもたちは、団地内の通路や駐車場でよく遊んでいます。1 年前は、団地内の通路や住棟間の空地で自転車を元気に乗り回す子供たちがいました。中上団地では、団地隣の学校（廃校）の水の入っていないプール内でキャッチボールや火遊びをしている子どもがいましたが、自治会長らが注意をしてからあまり見られなくなりました。幸い、団地内で遊んでいる最中の怪我は発生していませんが、車が危険なため、道路では遊ばないように言い聞かせています。

### 住環境の問題と改善

昨年 8 月以降、仮設住宅の改修工事として、1) 窓サッシを結露がしにくく、気密性の高い二重サッシに、2) カーテンだった風呂とトイレの仕切りにドアをつける、3) 洗濯物が雨で濡れないように軒先を延長、4) 冬場のためにトイレの水の不凍処理対策、が行われました。

この他、森林保全団体 more trees がペレットストーブを各住戸と談話室に設置してくれました。住田町内等の林業関係者らによる SUMITA チェーンアート柚遊会が団地の環境整備に協力し、「熊のプランター」等を提供してくれました。TOYOTA や愛知学院大学のボランティアが団地内と団地周囲に花壇を整備していただき、NPO 愛知ネットは、

近隣の農地を借りた団地住民の共同農園（10 区画）の栽培や環境整備等を支援いただきました。なお、団地内の駐車場が1戸に1台分しか用意されていないため、3団地とも近隣に駐車場を借りています。

### 自治会活動

住田町の仮設住宅団地では、特別な会を設けなくても、玄関が向かい合っている住戸の前に人が集まり、コミュニケーションが自然発生しています。邑サポートというボランティア団体が地域コミュニティ形成の支援団体として継続的に3団地の自治会活動を支援しています。各種イベントを企画・開催するほか、居住者アンケートを毎年実施しています。イベントは比較的頻繁に行われており、中上団地では民生委員が開催するイベントもあり、民生委員と生活支援相談員が仮設支援員を兼ねています。

住田町の仮設住宅のコミュニティ活動は、周辺地域の地元自治会や近隣の人たちの協力があることが特徴で、例えば、住田町内若手有志団体「SMP」が田んぼを通じた交流会「よいとこファーム」を催しています。また、お花見会やクリスマスパーティなどは住田町長や外部支援団体も参加し、交流が深められています。

### おわりに

住田町の仮設住宅には、高田・今泉地区の被災者が多く居住しています。資金的に余裕のある人は住宅再建して転出していますが、そうでない人は再建の見込みが立っていません。住宅再建や復興まちづくりの情報を求めて陸前高田市役所に行くと、専門用語ばかりを話され理解できなかったが、最近は改善されてきた」「年配の方々への噛み砕いた話し方にはまだ課題が残っている」とのことです。

（文責：山本俊哉／明治大学）



玄関が向かい合う住戸配置（本町）



軒先を延ばした仮設住宅（火石）

2013年10月10日発行

**陸前高田の応急仮設住宅団地調査報告〈概要版〉**

陸前高田地域再生支援研究プロジェクト

URL: <http://www.rikuzentakataj.jimdo.com/>

〒194-0298

東京都町田市相原町 4342

法政大学現代福祉学部 宮城 孝（研究代表）

[miyasiro@hosei.ac.jp](mailto:miyasiro@hosei.ac.jp)